

タイトル	モンゴル文学の学科史について ドロンテンゲル（満全）
著者	テレングト，アイトル；TERENGUTO, Aitoru
引用	北海学園大学人文論集(68)：227-246
発行日	2020-03-31

モンゴル文学の学科史について¹

ドロントengel(満全)²

テレント・アイトル訳³

要旨

本論文は、学科（ジャンル）理論の枠組からモンゴル文学学科史の諸問題を取り上げ、いわゆる学科の概念・モンゴル文学学科の古代形態「明所」と現代形態の「学科」の成立と、その発展過程の各段階を解析して、モンゴル文学学科は、国際的な知識体系に属するものだという見解を呈示するもので、なお、当面、モンゴル文学の学科の構築や体系的発展において直面している諸問題のなかで、学科内部において情報が閉塞し、学術的な交流がスムーズに行われていない傾向にあることを指摘して、モンゴル文学学科の可能性と展望を検討したものである。

キーワード：モンゴル文学・学科・形態

はじめに

いわゆる学科とは、知識の分類や知識の生産と知識の規範を意味し、一種の組織化した知のシステムのことを指す。『中国語・モンゴル語詞典』（1964）における見出し語「学科」のことについて、モンゴル語において「Sinjilegen-ü Sakav-a, Surqu Kic'iyel-ün törül, bolbasural-un törül」（学科・学習課程の種類・研究、訓練の種類）⁴と訳されている。中国語の「学科」という言葉は、その辞源からみると、ラテン語の「disciplina」、ドイツ語「disziplin」、フランス語「discipline」、英語「discipline」に対応している⁵。この言葉には、それらの文化の言説のコンテキストのなかで、「知識の種類」、「訓練の課程」、あるいは「知識と権力」の意味が含有されている⁶。

言うまでもなく、現代の学科という概念とその分類・規制は、西洋から移植されてきたもので、知識を分類する方法でもある。西学東漸についての研究によると、明の時代からヨーロッパのキリスト教宣教師が東洋において、それまでかつてなかった新しい知識体系と教育理念をもたらしたという。明の天啓3年(1623)、イタリア宣教師ジュリオ・アレーニ(Giulio Aleni, 艾儒略, 1582-1649)は、中国語で『職方外紀』『西学凡』という二冊の本を刊行し、明朝には系統的にヨーロッパの知識の分類の法則と教育システムが紹介されたのである。

その小学には、文科として4種類があるという。すなわち、古賢の名訓、各国の史書、各国の国語、文章・評論である。学習者は、7～8歳から学んで17～18歳で修了する。なお、この小学は儒教の試験に習って、優秀者は中学に進学し、つまり理科を学ぶ。その理科には、三つの科目がある。初年目は、論理学、いわば、是非を弁ずる方法を学ぶ。二年目は、物理学、それを訳せば、「性理(世界本性)の道を探求する」ことになる。三年目は、形而上学、つまり「性理(人間本性)を究明する」ことを勉強する。以上の学科を総じていえば、哲学だという。修了したら、また儒教の試験に習って、また試験をするが、優秀な学生は大学に進学する。大学は四科目に分けられ、学習者は自分で選択する。その一つは医科といって病気を治療することを学ぶ。次は政治学科といって、治世の事を学ぶ。その次は教育学科として、教育法を学び、最後は、道德科として、教化を振興することを学ぶ。いずれもみんな数年間勉強して修了するが、儒学の試験と同じく、さらに厳格な試験を与え、検証する。(艾儒略『職方外紀』(第二卷)⁷。

アレーニの紹介によると、小学校では約10年間、文系の知識(修辞学〈Rhetoric〉を含む社会学分野の知識)を勉強し、中学において3年間で理系の知識⁸(哲学〈Philosophia〉自然科学を含む知識)や、論理学(Logic)、物理学(Physica)、形而上学(Metaphysica)と数学(Mathmatica)などの

学科の知識を勉強する。大学では、4種類の専門があり、すなわち、医学（Medicina）、法律学（Leges）、宗教学（Cananis）、神学（Theologia）であるが、それについては数年間勉強する。この例から見ると、中国の現代学科の概念は西洋・ヨーロッパの知識の分類の法則と教育体系と密接な関係にあることが明らかである。

一、古代の形態——「明処」

西洋の学科思想がモンゴル地域に入るまで、モンゴル族のラマ僧侶はすでに雪国のチベット聖地から仏教の知識分類法——「五明学説」を導入していた。仏教の「五明学説」は、さらに「大五明」と「小五明」に分けられ、その全体が仏教の「十明」か、あるいは「十明処」と称される。すなわち、内明（教理学）、因明（論理学）、声明（音韻学・文学）、工巧明（工学・数学・暦学）、医方明（医学）が大五明と称され、さらに辞修学、辞藻学、韻律学、戯劇学、歴算学を「小五明」⁹と称す。十明処は、当時諸種類の知識をほぼカバーし、かつ体系的になって、仏教が伝わったところには、必ずや十明学説が伝播され、現地の文化に溶け込み、格別な知識体系を形成していた。

モンゴルのラマ僧侶のザヤバンディダロサンプリンツイ（札雅班第達羅桑普仁菜 1642-1715）、ソンプカナムプイェシバンジェ（松巴堪布耶喜班覚 1704-1788）、レジャンバアワントダン（熱絳巴阿旺吐丹 18世紀末-19世紀初）、アラシャンレジャンバアワンダンデ（阿拉善熱絳巴阿旺丹達 1759-1840）、ジャンリンバンディデアワンロサンダビジェンツ（江隆班第達阿旺羅桑丹碧堅贊 1770-1845）などは、仏教の明処について系統的に研究し、その属性・分類・内的関係・役割・機能について述べ、それらを明らかにしていた。彼らは十明処の基本的な内包に基づき、それを平常な明処と非常な明処、外在的な明処と内在的な明処、共同明処と非共同明処などと帰納して分類している。例えば、ザヤバンディダロサンプリンツは「修行に悟った通達者のみなさまは、五明を修行するというが、平常の明処と

非常の明処の二種類、因明と声明の二種類、工巧明と医方明の二種類」¹⁰を平常の明処とし、内明を非常の明処に入れて考えていた。ソンパカンブイエシバンジェは「いわゆる仏典の統論において、平常と非常の分け方は、まず大小から論ずる」¹¹という。ここからみると、平常の明処は「声明、因明、工巧明と医方明という四者」及び辞修、述語、編纂、易術、歴算を包含する¹²が、内明は、非常の明処に属しているのである。平常の明処については、仏教各学派が共通して研修・修行せねばならぬ知識体系であり、非常の明処は、仏教各学派が独自に崇めて修行する知識体系である。モンゴルのラマ僧侶は、声明、工巧明、辞修学、辞藻学（意味論）を一つの文学学科のカテゴリーとして扱い、かつ文学は言語の芸術と意味の学問で、いずれも諸明処に関わるものだと考えていた。アワンダンデがいうように「文章とは、内外の明に関わり、さらにインド・チベットの經典の文章の善を受け継いでいるので、賢者・達者は潜心して修行せねばならぬ」¹³という。仏教經典のなか、『律蔵』は、当時の知識をさらに十八の明処に分類している。すなわち、式叉論は六十四種類の能法を明らかにするもので、毘伽論は、諸無常を釈義する方法である。柯刺波論は、諸天仙の名字が古来因縁のあることを釈義するもので、堅低沙論は、天文・地理・算数などを解釈するもので、闍陀論は、首盧加（韻文）の作法を解釈するものである。そして、順次、尼鹿多論は、一切の物を命名する因縁を解釈するもの、肩亡婆論は、諸法の是非を解釈するもの、那邪毗莎多論は、諸法の道理を明らかにするもの、伊底迦婆論は、伝記や宿命を明らかにするもの、僧法論は、二十五の諦の意義を明らかにするもの、課伽論は、精神的に集中することを明らかにするもの、陀菟論は、軍隊兵器の扱い方を解釈するもの、犍闍婆論は、音楽を解釈するもの、阿輪陀は、医学を釈義するもの、耶柔吠陀は、祭式の知識のこと、黎明吠陀は、詠歌や頌歌を明らかにしたもの、阿達婆吠陀は、呪術詩集を明らかにしたもの、婆摩吠陀は、頌歌・賛美歌を扱ったもので、これら全部で十八種類の明処（科目）からなるものである¹⁴。

ラマ僧侶は、こういったインドから伝播してきた仏教の明学を苦学して研鑽し、かつその方法と規則に従って当時の知識を分類していた。例えば、

1717年、ラシ（拉希）、ダンジン（丹金）、アリビデフ（阿日毕德呼）、アビダ（阿毕达）、センゲ（僧格）、アルナ（阿日那）、セレン（色楞）、グンドジャブ（衮都扎布）、サンブジュ（桑布珠）、ジュンジュ（峻珠）、バンディ（班第）、グァンプ（关布）、イダム（伊德木）、ソガル（苏哈日）、ドルジ（道尔吉）、ポイント（宝音图）などは、満州語とモンゴル語を対照して、北京で初めてのモンゴル語辞典を刊行したのである。この辞典は「天文・地理・人事・五行・四時・政略・声音・楽曲・兵法・器皿・飲食・禽獸・草木など二百八〇余りの科目（分野）」に分類され、二十一巻からなるものである¹⁵。この辞典は言語についての解釈辞典だが、言語の角度から当時の知識を分類したものである。1741～1742年の間、グンブジャブ（衮卜扎布）、ビリグンダライ（毕力贡达来）、アビダ（阿毕达）らによって『甘珠尔』（ガンジョル）と『丹珠尔』（ダンジョル）を編纂したが、その内容は、『知恵の鑑』の五明辞典のモンゴル語訳である。この辞典には内明、因明、声明、工巧明、医方明の諸類が含まれている¹⁶。

インド・チベットから伝播されてきた明処の理念と、その学科・規定は、いわば、古代モンゴル民衆に受容された初期の学科知識である。それらは現代に移植してきた西洋の学科の理念・規定・解釈と方法論とはまったく違うものだが、しかしながらそれらは一種の知識を帰納し、伝播し、生産する体系的な学科であり、かつそれらは一種の旧い形態の学科であり、長い期間にわたってモンゴル人の生の営みに影響を与えてきたのである。

二、現代の形態 ― 学科

現代の学科の概念並びにその意味と名称は、いつ、いかなる経緯でモンゴル地域に伝播してきたか、実際、それについて確実に実証して明らかにするのは困難である。英語の「discipline」と、その関連の用語・概念・方法論及びその知識を分類するモデルは、いったい中国語を媒体にしてモンゴル地域に入ってきたのか？ それとも、日本語あるいはロシア語を媒体にしてモンゴル地域に伝播してきたのか？ 当面、それについて十分な根

拠のある例証はほとんどない。ただし、わずかな例証だが、散在してきた証をみることができる。

19世紀末までの半世紀の間、ロシアのカザン大学やペテルブルグ大学において、相次いでモンゴル語専攻が設立され、モンゴル言語文学が大学に導入され、モンゴル語は大学生の専門的な学科として成立されていた。そこでとりわけ、記念すべきなのは、貢献者の二人、ロシアの学者コワレーフスキー（1800-1870）と、ボツデニエエフ（1851-1920）である。前者は初めて大学生のためにモンゴル文学教科書を編纂した教授で、その『モンゴル文学選集』は、1836年カザン市に出版される。後者のボツデニエエフは、大学生のために初めて系統的にモンゴル文学を教えた大学教員であった。この二つの例から判明できるが、現代モンゴル文学という学科（ジャンル）は、ディシプリンとして初めて成立されたのが中国の教育機関においてではなく、隣国のロシアの大学においてであった¹⁷。

なお、現代においてモンゴル族の文人によって著述されたもので、西洋から導入された学科理念及び学科規定に従って知識を帰納して分類した教育科目も存在していた。例えば、汪国鈞の編著『蒙古紀聞』（1918）において次のように記録されている。

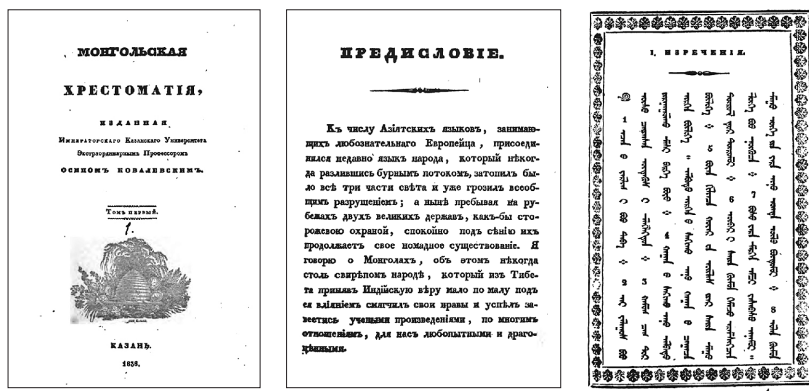


図1 1836年、コワレーフスキー編『モンゴル文学選集』に基づいた教科書の表紙と内容



図2 1900年、ボツデニエエフ編集され『モンゴル文学選集』表紙と内容

光緒二十七年夏、広州の人陸韜は、当の王の囑託によって、学堂の規定と教授法の草案を作成したが、当時、日本人の寺田亀之助と通訳の小池万平が手伝ってすべての規則を斟酌した上で作成し、本年の十月崇正学堂を開校し、学生60名に教え、後に120名まで増やした。学校監督は汪良輔で、中国語教員は陸涛と刑宜亭であり、モンゴル語の教員は白文生などである。『崇正学堂の創立』¹⁸

光緒二十九年正月、当該の王は自ら日本の博覧会を見学し、帰国した際、陸軍大尉伊藤柳太郎、文学学士吉野四郎、浙江人の姚煜の通訳で、本年7月学校が開校した。近くの子弟や政府内の部下と騎馬隊・歩兵・護衛隊の教官など20名を選んで士官生として、また騎馬隊・歩兵100名の軍隊として、学科科目は学と術という二科目を分けて、学科には歩兵訓練、野外任務、射撃訓練、体操訓練、算数、日本語、地理、歴史があり、術科にはそれぞれ教練があり、それには分隊教練、小隊教練、中隊教練、徒手教練、器械教練、野外演習、30年式の銃撃法の訓練がある。『守正武学堂の創立』¹⁹

以上の記載により、当時、カラチン（喀喇沁）王であるグンサンノルブ（貢桑诺尔布）は、1902年崇正学堂と、1904年守正武学堂を創立したこと



図3 崇正学堂の教科書，1907年版

がわかり，その課程の構成及びその分類方法は，ほぼ現代知識の分類規定——学科の方法論に従っていることが明らかである。その守正武学堂の課程の構成からみると，学堂の課程は，学と術と二分類されており，その課程はさらに細分化されて，算数・日本語・地理・歴史など学科課程が違った専門から構成されている。ゲンサンノルブの創立した新しい学堂において，教科書として用いた『モンゴル読本』（1907）の内容も現代の学科理念・モデルと規定に従っていることがわかる。例えば，修身——行為である訓戒（倫理的なものを含む〈引用者〉）と，地理——地元の旗（行政機関）に属する地誌名称（地理学的なものを含む〈引用者〉）と，長歌——諸表現類（文学的なものを含む〈引用者〉）²⁰などは，その例であるが，換言すれ

ば、『モンゴル読本』は、すでに倫理学・地理学・歴史学・文学などの現代的な学科の諸内容をカバーしていたのである。

こうした西洋の現代学科理念とモデル及びジャンル・規定は、中国語と日本語を媒体にして、当時のカラチン（喀喇沁）旗に移植されたが、当然、それはカラチン旗の新しい学堂で就任した内地教員ないし外国籍（日本国）の教員にも関係していたのである。

カラチン旗の新しい学堂は日本から外国教員を招聘すると同時に、日本の学校も中国からモンゴル語の教員を招聘していた²¹。例えば、ロブサンチョイダン（罗布桑却丹）、ハン・ムチンア（韩穆精阿）、フーロンガ（福隆阿）、エルデンバートル（额尔德木巴特尔）などがいたが、そのなか、ロブサンチョイダンは、逆に日本の招聘で日本でのモンゴル語教育の先駆者となっていた。彼は1907年-1977年²²、また1909年-1912年の間²³、東京外国語学校に招聘され、1912年-1914年の間²⁴、京都本願寺仏学院に招聘され、日本では初めてのモンゴル語教員として迎えられ、その間、彼は日本、あるいは日本に受容された西洋の学科理念とモデル及びジャンル・規定を習得したのである。そしてその習得したものをまとめて『蒙古風俗録』として著したが、後にマントフ（満都呼）、ドラーン（多兰）によって『ロブサンチョイダン研究』において系統的に研究され、その足跡が明らかにされている²⁵。

東京外国語大学附属図書館においてロブサンチョイダンの三種類の『蒙古風俗録』の写本が保存されているが、その三種類の写本は、すなわち『有关蒙古人的由来及风俗』（表紙には「蒙古人の由来と風俗に就いて」という日本語も記されている）と、『蒙古風俗录略』（第一巻、第四巻と第七巻の表紙には「蒙古風俗志」などの日本語が記されている）と、中国語で訳された『蒙古風俗录』である。

その中の中国語訳の写本『蒙古風俗录』の目次は以下のようになっている。

蒙古源来（モンゴルの由来）第一；衣服居室（服装居住）第二；使用

家具 第三；飲食茶酒 第四；分別種族（民族分類）第五；王公襲爵（貴族階級）第六；比丁承職（官職繼承）第七；古來習慣（伝統習慣）第八；王公結婚 第九；民間結婚 第十；新年礼則（新年行事）第十一；政署法律（行政法律）第十二；賞罰刑具 第十三；审判規則（裁判規定）第十四；人民訴訟（民間訴訟）第十五；蒙古規矩（モンゴル慣習や掟）第十六；家庭教育 第十七；各種出產（各種の物産）第十八；牧養節氣（放牧季節）第十九；山川神社 第二十；忌晨祭祀（タブーや祭祀）第二一；結婚定礼（結婚礼節や結納金）第二二；賀喜礼物（祝祭贈答）第二三；媒人規條（仲人規定）第二四；火葬土葬 第二五；分家產例（財産相続）第二六；立国年号 第二七；文字書籍 第二八；對韻說詩（韻律詩文）第二九；入喇嘛教（ラマ教入信）第三十；庫倫喇嘛（クーロンとラマ教）第三一；西藏喇嘛（チベットラマ教）第三二；偉人名仕 第三三；新旧唱歌 第三四；文學習武（文武修練）第三五；上司納差（上官義務）第三六；兵丁規條（軍人規定）第三七；營業生計（なりわい・生計）第三八；交通貿易 第三九；古語伝説 第四十；女子手工（女性と手作業）第四一；行围打猎（狩獵）第四二；盟長旗務（盟と旗の行政機関の業務）第四三；会场摔跤（祭り相撲）第四四；庙会布札（寺廟祭のツァンパ）第四五；鄂博跑馬（オボ祭りと競馬）第四六；辺界地図（国境と地図）第四七；山河人名（地名・人名）第四八；長生草木（植物草木）第四九；耕地新章（農地開拓）第五十；栽种子量（田植え）第五一；医生病症（医者と医学）第五二；寒暑时候（寒暑の季節節目）第五三；出荒賣地（荒れ地と土地売買）第五四；内政外属（内外行政）第五五；人民性质（国民性）第五六；避暑游乐（避暑と娯楽）第五七；用度銀錢（財政節約）第五八；寿数身量（長寿と身体）第五九；家庭伝授（家訓伝授）第六十；密謀來世（來世占卜）第六一²⁶（以上の訳語において、中国語と日本語との共通のものは、原文のままにした〈訳者〉）。

ただし、中国国内に流布しているモンゴル語版の『蒙古風俗録』は、10

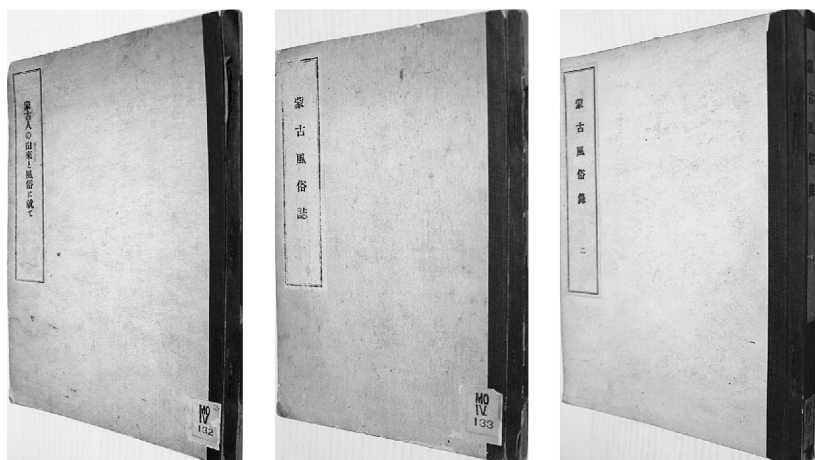


図4 東京外国語大学附属図書館收藏の《蒙古風俗録》三種手抄体本封面

巻58の科目によって構成され、内容も諸学科にわたって触れられている²⁷。このように、『蒙古風俗録』の豊富な内容と細分化された分類と体系的な構成からみて、ロブサンチョイダンは、現代の学科理念とモデル・規定と解釈を受容しており、モンゴルの慣習風土に対して科学的に分類していることがわかる。この点において、研究者らによって明確に指摘され、「われわれが古今内外の学者と専門家によって推奨された民俗学的な分類法と規則をもって、『蒙古風俗録』と比較してわかることだが、両者において、詳細なところで互いに相違が見られたものの、大体的内容上は、基本的に同じで、いずれも民俗学の体系に属しており、その内容のカテゴリー



図5 三つの種類の手写本の『蒙古風俗録』

と分類する基本基準は一致しているのである」²⁸ という。

なお、大正4年、すなわち1915年、南満州鉄道株式会社はモンゴル語・中国語対照詞典『モンゴル語』（佐藤富江編）を刊行したが、そこで常用モンゴル語として、学科毎に32種類に分類し、同時にすべての見出し語のモンゴル語と中国語には、日本語の発音で表記をつけている。

その『モンゴル語』（1915年）辞典の目次は次の通りである。

数字；日月；干支；方角；時刻；天文；地理；身体；人倫；人；
家屋；器具物品；衣服装飾；四季寒暑；草木；果物；蔬菜；飲食物；
金石類；鳥類；獸類；魚類；蟲類；舟車類；馬具；樂器遊具；
學事；醫事；藥類；兵器；神佛；修飾語。²⁹

これらの目次からも容易にわかることであるが、西洋現代の学科理念とモデル及びジャンル・規定は、ロシア語、日本語と中国語を媒体にして、それぞれ違うルートでモンゴル地域に導入され、それが徐々に受容されてきたのである。

それでは、今まで研究者たちは、学科の概念について、どのように論じてきたのか？ その関連の研究は数多くあるが、例えば、ヘックホーソン（Hechhausen）は、経験と事実分析の方法によって考察した結果、学科とは、同種類の問題を専門として学科を分けて研究したもので、それによって知識の新旧の交替を実現し、知識の一体化と、理論的な体系化及び再システム化が実現されるという。その論旨には、三つの点が含まれる。① 同じ種類のことを研究対象にしたものにしたことである。つまり、同一学科に属する研究は、同じ種類の問題、あるいはそれに相当する研究対象に対して行われるもので、その問題解決の方途、あるいは方法は違ってよいが、ただし、研究対象は、かならず同一であるべきである。② 知識を更新することである。学科とは、固定された研究対象に対して、専門的研究を通して、さらに新しい知識体系及びそのモデルと規定・ジャンルに対して科学的な更新を行なうことであり、従って、学科とは、教育と不可分

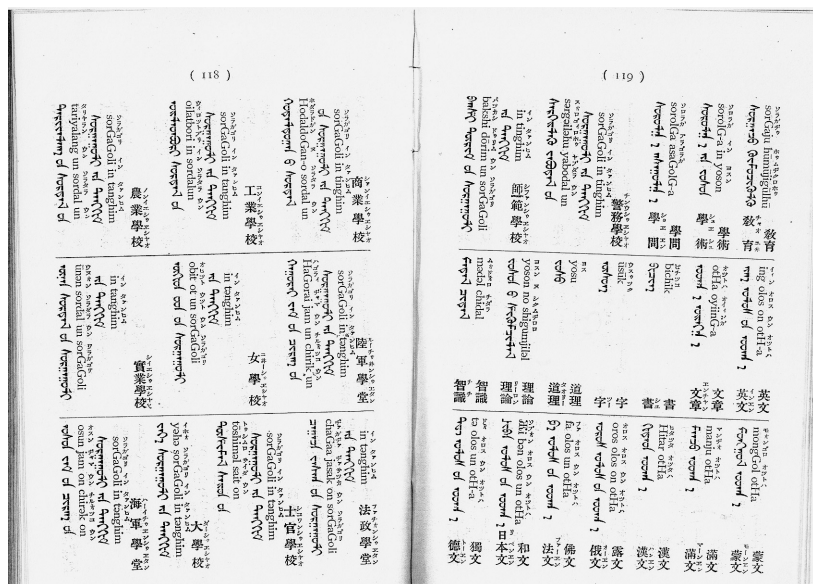
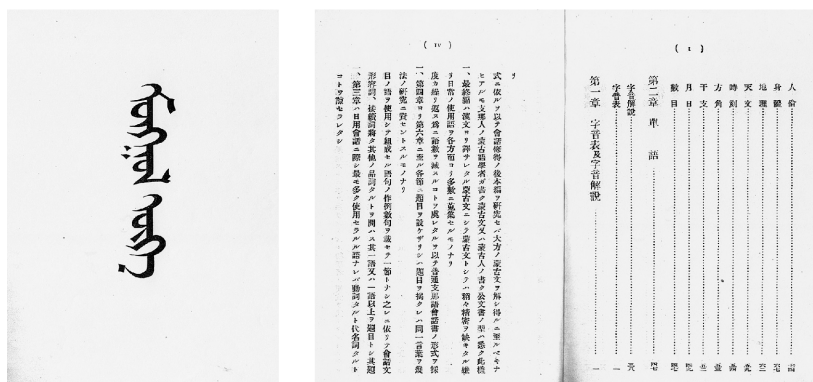


図6 『モンゴル語』 辞典の表紙と本文の一部分

の関係にあることである。③ 知識を体系化することである。学科とは、現在の知識を更新すると共に、既存の知識とは切っても切れない密接な関係にあることが明らかで、さらに該当の同一の知識体系に吸収されるようなことでもある。それゆえ、学科とは、散在して散らばられている知識を統一して帰納する独特な働きを有することである³⁰。

ドイツの研究者 Guntau と Laitko の説によると、学科とは、具体的な研究対象を有する科学的な研究システムのことであり、そこには情報連絡の共同体の構成や、新たな体制を構築する傾向と、学術的教育的方法によって自己再生産を行なうという特徴がある。その学説には四つ内容がある。

① 具体的な研究対象であること。すべての学科は、その成立が具体的な研究対象に基づいていることである。もし具体的な研究対象から離れると、その学科は成り立つ基盤がなくなるのである。

② 情報の連携と総合化のことである。一つの成熟した学科とは、絶えず相関関係の知識と情報によって結びつけられ、充実した体系が構築されたことである。

③ 体系の構築と規定・ジャンル・掟が設定されていることである。すべての学科は、それ自身に属する規定・ジャンル・掟と方法論を有することである。

④ 学術的育成の方法があることである。すべての学科は、いずれも学術的な育成方法に従って、新しい知識・新しい理論・新しい規定・ジャンルと方法論を生産し、絶えず学科の新しい生産力——人材を育成し、体系的な学科を完善な状態に保つことを求めるのである³¹。

以上の諸論点を概括してみると、学科の概念は、以下のように、理解できよう。

- 1) 学科とは、知識の分類の必要に応じて生産され、具体的な研究対象を有し、科学的研究を行なうシステムのことである。
- 2) 学科とは、知識を生産し、人材を育成することを目的にした、学術的な秩序のことである。
- 3) 学科とは、効率的に知識のコミュニケーションを促し、規定・ジャンル及び方法論についての情報・文献・人材を組織するシステムのことである。

三、発展段階——モンゴル文学の学科

1902年から1914年の間、ドイツの考古学探検隊は、中国新疆ウィーグル・トルファンにおいてウィーグル・モンゴル語文献を発見した³²。その

発見内容から判明されたことだが、モンゴル文学研究は、13世紀末から14世紀初め頃にすでに行われていたという。³³それが、チョイジーオソル（捌思吉斡节儿）の著作に関係するもので、チョイジーオソル（別名、仏の光）とは、元の時代の著名な仏教学者・翻訳家・言語学者と詩人（出生年が不明）のことを指し、彼についての記録は、『黄金史』（モンゴル語）、『益希班覚仏教史』（チベット語）と『元史』などのモンゴル語・チベット語・中国語の文献に散見するのみである。彼はモンゴル語・チベット語・ウィーグル語を精通し、多くの著作を残したが、大部分は散逸されている。今日まで伝わってきた『仏祖釈迦牟尼十二行』と『入菩薩行径』（モンゴル語訳）、『入菩薩行径釈』と『聖五主尊大乘経』（モンゴル語訳、ただし訳者には異議がある）、『「聖五主尊大乘経」跋詩』と『摩訶噶刺神頌』などがあるが、その文学の創作と研究が、後の時代には深遠な影響を与えてきた。例えば、『仏祖釈迦牟尼十二行』は活仏高僧の伝記をどのように作成するか、その模範文を呈示し³⁴、『摩訶噶刺神頌』は、14世紀のモンゴル族の賛美詩歌の経典だと称されている。そのなかで、『入菩薩行径釈』は研究界において、高僧ラマ達の注釈文及び詩をもって詩を批評するというスタイルの源流を創り出したのだと評価され、モンゴル文学研究という分野においては、嚆矢となる作品である³⁵。『入菩薩行径釈』は、1299年に完成され、1312年、大都（北京）において木版で出版された。

かくして、モンゴル文学研究は、かつてインド・チベット詩学、中国の

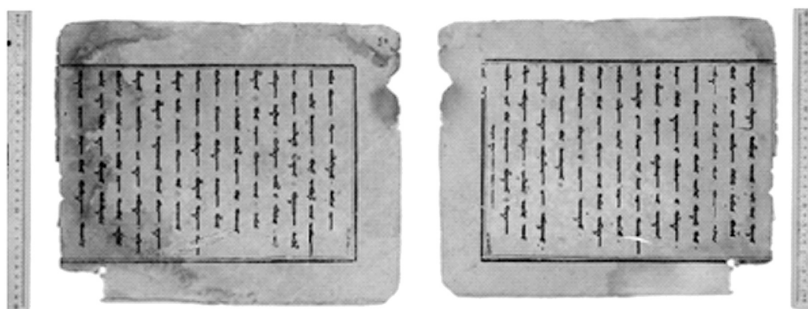


図7 チョイジーオソル『入菩薩行経釈』（1312）

詩学と西洋の文学理論に影響され、徐々に独特な特徴を有するような学科として発展してきた。すなわち、古代仏教学の明処のカテゴリーから出発して、現在の現代科学的な領域・学科として変貌してきたのである。それは、いわば、モンゴル文学は古代の形態——明処から、現代の形態——学科まで、以下のような三つの段階を経て発展してきたといえることができる。

- 一、萌芽の段階——13世紀末か14世紀初めから19世紀末まで、いわば1299年に編纂され、そして1312年『入菩薩行径釈』が出版された時期から、1895年ロシアの研究者ア・マ・ボツデニエフがペテルブルク大学においてモンゴル文学課程を教授していた頃まで、モンゴル文学の学科は、領域・学科史として、萌芽の段階になる。この萌芽期は、学科形成の準備の段階であり、テキスト研究は主として自発的かつ断片的に行われていた。諸学科の術語あるいは学科の基本カテゴリーは、例えばホルボー（吟唱詩）・物語・詩・歌・祝詞・讃辞・文章・文学などのタームは、この段階において現れてきたのである。それゆえ、萌芽の段階は、学科の内在的知識の系譜が形成してきた段階である。
- 二、創出の段階——1895年から20世紀80～90年まで、中国・モンゴル国・日本・ロシア及び西洋において、大学でモンゴル文学の専攻として「学士・修士・博士」という三つのレベルの学位授与できる体制が形成され、モンゴル文学の学科史の創出の段階になる。創出の段階とは学科の誕生と、学科の形成の時期を指す。その特徴は、文学研究がはじめて組織化され構造化され、文学教育は学校教育としてスタートし、独立・自立した知識のシステムになる。それゆえ、創出の段階は、学科の組織の管理体制が形成された段階でもある。
- 三、発展の段階——20世紀80～90年代から現在までの時期は、モンゴル文学の学科史の発展の段階になる。発展の段階は、学科のグレードアップあるいは完成に向かう時期でもある。その特徴は、学科の合法的な地位がアップ（学科の目録が作成されて公表され、高学歴教育が形成れる）され、社会的に影響力が拡大し、研究の領域が拡張され、国家の権力などが介入してきたのである。それゆえ、発展の段階は、学

科の外部の権力系統が広がっていく段階でもある。

ドイツの研究者 Guntau と Laitko は、成熟した学科が三つの指標があるという。すなわち、学科内のコミュニケーション・情報交流と、学科の再生産と、学科の建設の制度である³⁶。これらの指標からみると、モンゴル文学の学科は、さしあたり、発展の段階に入っているが、しかし、成熟した学科にはなっておらず、まだ諸問題が存在している。すなわち、学科内部のコミュニケーション・情報交流が滞る傾向にあり、国内の研究者は、外国のモンゴル文学研究状況ないし教育状況を把握しておらず、国外の資料資源と最新の情報を活用できていない。それと同様、外国研究者も国内のモンゴル文学研究と教育状況を把握しておらず、国内の資料資源と最新の情報をあまり利用していない。

結語

以上、モンゴル文学の学科史を総合的に再検討してきたが、その結論として、以下の諸点について指摘できる。

- 1, モンゴル文学の学科・領域の知識体系は、国際的な特質があり、その内容は言語において、モンゴル語（ウィーグル・モンゴル語、トド・モンゴル語とキリル・モンゴル語）、中国語、チベット語、満州語、日本語、英語、ロシア語、ドイツ語など8種類の言語と、10種類の文字資料によって記録されている。なお、中国、モンゴル国、ロシア（ブリヤート、カルムイク、ツヴァーなど）、日本、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、イギリス、ハンガリー、フィンランドなど10カ国に跨る学科・領域でもある。モンゴル文学の学科・領域・分野は、断片的な古文書の研究から現代的、系統的な研究へと発展してきたが、それがいわゆる古代の形態——明処から、現代の形態——学科へと展開してきたことであろう。それに伴って、国内の研究者の研究から国外の研究者の研究へと展開し、知識の分類と再整理されていくことから、知識の生産・人材育成へと進展してきたのである。それら展開と発展は、約七〇〇年間の歴史を要したのである。
- 2, モンゴル文学の学科の直面している主な問題は、学科内部のコミュニケーション・情報交流が閉塞していることである。すなわち、国内研究者は、国

外のモンゴル文学研究状況及び最新の情報を把握しておらず、国外の資料資源を利用していない。それと同様、国外研究者も内モンゴル文学研究状況及び最新の情報を把握しておらず、国内の資料が十分に利用できていない。

3. モンゴル文学研究の最終目標は、体系的な学科を作り出すことだけではなく、学科・領域という現代の知識の体系及びその規定・解釈を通じて、モンゴル文学研究の四つの目標に達することにある。すなわち、文学創作をリードして、そのため文学理論的根拠を提供すること。長期の蓄積によってよりよい伝統を作り出し、よい伝統こそ生き長らえること。人類の文明の対話に参加すること。そして、世界秩序の構築に奉仕することである。

注

- 1 ドロンテンゲル（満全）「モンゴル文学学科史総論」『民族文学研究』2019年2月号（第37巻）（137～146頁）。
- 2 ドロンテンゲル（満全）文学博士，中国内モンゴル自治区師範大学教授，内モンゴル自治区作家協会主席，中国哲学社会科学優秀人材と国家文化名人（2018年）に選出される。著書には『モンゴル文学体系研究』（モンゴル語）『零細と体系』（中国語）『モンゴル文学の学科史——整理と分析』（キリル・モンゴル語）『モンゴル文学』（日本語）など20部ほどの学術研究書を著し，中国のモンゴル文学研究分野において第一人者である。
- 3 記者（内モンゴル師範大学客員教授2019.3）は，内モンゴル師範大学モンゴル学院のシンポジウムや学術的なディスカッションにおいて，複数の領域にわたって一つの問いかけ——「西洋の人文学はいかなる普遍性と妥当性を有するか」——に繰り返し遭遇してきた。この論文は，そういった問いかけと問題意識のもとで選出し，日本の関係領域の研究者と共有することを目的に訳出したものである。
- 4 内モンゴル自治区社会科学院モンゴル言語文字研究所編著『中国語・モンゴル語詞典』内蒙古大学出版社（初版1964），1983年（829頁）。
- 5 杨天平「学科概念的沿演与指谓」『大学教育科学』2004年，第1号。
- 6 庞青山「大学学科制度内涵探析」『现代大学教育』2004年，第4号。
- 7 栗永清『知识生产与学科规训：晚清以来的中国文学学科史探微』中国社会科学出版社，2015年（34頁）。
- 8 『丙寅』研究誌，第6号と第11号のなか，「理科——理学」を解釈した箇所。また，额尔德木图，宝音陶克陶编著《ト和克什克及其蒙古文学会》内蒙古文化出版社，1993年（435頁）。

- 9 席・却玛等编『佛教文化辞典』内蒙古人民出版社, 2003 年 (66 頁)。
- 10 罗桑普仁莱著, 贡嘎嘉措译『明镜』纸版の經典。また博・席贵『藏文中的蒙古文学理论体系』内蒙古大学博士学位论文, 2012 年 (144-145 頁)。
- 11 松巴堪布耶喜班觉『佛教史』(青格勒, 玛・宝柱校译)内蒙古人民出版社, 1993 年 (310 頁)。
- 12 同上書 (310-323 頁)。
- 13 阿旺丹达『珍珠念珠』(额尔敦白乙蒙译)载巴・格日勒图编著『蒙古僧侣藏文诗作及诗论选: 悦目集』内蒙古文化出版社, 1991 年 (482 頁)。
- 14 仁钦嘎瓦, 斯钦朝克图编著『智慧之鉴』内蒙古人民出版社, 1983 年 (44 頁)。
- 15 内蒙古蒙古语言文学历史研究所『二十一卷本辞典』内蒙古人民出版社, 1979 年 (1 頁)。
- 16 仁钦嘎瓦, 斯钦朝克图编著『智慧之鉴』(5~176 頁)。
- 17 ドロンテンゲル(満全)「蒙古文学学校教育初探——以俄罗斯, 日本学校教科书为中心」『内蒙古新文学学会成立大会暨第一次学术研讨会论文集』(内部資料) 2015 年 (17-34 頁)。
- 18 汪国钧『蒙古纪闻』(玛希, 徐世明校注)内蒙古人民出版社, 2006 年 (84 頁)。
- 19 同上書 (85 頁)。
- 20 『蒙文読本』日本圖書株式会社, 明治 40 年 4 月 20 日 (1 頁)。
- 21 二木博史, 小澤重男『モンゴル語』東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史』1999 年 (1006 頁)。
- 22 羅布桑却丹『蒙古風俗録』(哈・丹碧扎拉桑批注)内蒙古人民出版社, 1982 年 (7 頁)。
- 23 内田孝「大阪外国語大学におけるモンゴル人教師 (1922-1950)」『内陸アジア史研究』2004 年 3 月 (第 19 号)。
- 24 辻雄二「羅布桑却丹著〈蒙古風俗録〉」『琉球大学教育学部紀要』第一部, 1998 年 3 月 (76 頁)。
- 25 満都呼, 多兰编著『罗布桑却丹研究』内蒙古文化出版社, 2000 年 (147-192 頁)。
- 26 罗子珍『蒙古风俗录』东京外国语大学附属图书馆藏本, 藏书号 molv136, (4-7 頁)。
- 27 罗布桑却丹『蒙古风俗录』(哈・丹碧扎拉桑批注 (1-6 頁)。
- 28 前掲, 満都呼, 多兰编著『罗布桑却丹研究』(206 頁)。
- 29 佐藤富江编『蒙古語』南满洲鉄道株式会社, 大正 4 年 5 月 30 日 (1-3 頁)。

- 30 譚鏡星, 曾陽素, 陳夢迂「从学科到学科群: 知识分类体系和知识政策的视角」『高等教育研究』2007年(第7号)。
- 31 阿梅龙「建构中国近代学科的分析框架—西方学科史理论的借鉴」『史学月刊』2012年, 第9号。
- 32 ドイツ・ベルリン民俗博物館は, 1902~1914年の間, A. Gruenwedel と A. V. Le. Cop を初め, 地質学的な探検隊を派遣し, 前後にして四回も新疆地域を考察した。彼らは, そこで10ヶ国語の文献, 古文書四万冊あまり発見したのである。そのほか, 大量な壁画や芸術作品をも入手した。(アル伯特・冯・勒柯克『新疆の地下文化宝藏』(陈海涛译) 新疆人民出版社, 1999年(2頁)。耿世民「德国柏林科学院吐鲁番学研究中心介绍」『西域研究』2003年, 第2号)。
- 33 チョイジ-オソル(擲思吉斡节儿) 编撰『入菩薩行径释』は, インド作家寂天のサンスクリット作品を注釈したものである。チョイジ-オソルは, 1299年に当該書を編纂し, 1312年に元の大都において木版で印刷し発行した。研究者たちは, この注釈作品は, モンゴル文学研究において最初のリテラシーだといい, しかも, チョイジ-オソルは, 明らかにモンゴル語訳『入菩薩行径』を注釈して, それを根拠にしたものである。それゆえ, モンゴル文学についての最初の研究は, モンゴル語母語の文献を対象にして, それを用いて研究したものではなく, 仏教学の經典の翻訳からスタートし, そこから初めてモンゴル文学研究の幕が開いたのである。
- 34 ドロンテンゲル(満全)『蒙古族书面文学的基本体系研究』辽宁民族出版社, 2007年(253-254頁)。
- 35 巴・格日勒图评注『蒙古文论集录』内蒙古大学出版社, 2003年(3-4頁)。
- 36 阿梅龙「建构中国近代学科的分析框架——西方学科史理论的借鉴」『史学月刊』2012年(第9号)。